

原 著

## 保育体験と保育職への動機との関連 —自主実習、日常的な保育経験、入学前の保育体験の検討—

原 孝成\*

### ＜要 旨＞

本研究は、学生の自主実習、日常的な乳幼児の接触及び短期大学入学以前の保育体験が、保育者希望動機づけとどのような関係にあるかを検討することを目的とする。194名の保育科に所属する短期大学生に対して質問紙調査を実施した。その結果、74.2%の学生が自主実習に参加していた。その中で66.2%の学生が3日間の自主実習に参加していた。ほとんどの学生が、自主実習中に未満児の保育や子どもたちの食事の援助に参加していた。また、全体の59.1%の学生が入学前に保育体験に参加していた。しかしながら、それらの学生の54.2%は1日という短期の保育体験であった。全学生の66.8%は日常的な乳幼児との接触の機会が全くないかあまりなかった。自主実習に参加した学生はそうでない学生よりも“今後授業で学びたいこと”のカテゴリーで具体的な遊び・実技の割合が高くなることが示された。また、自主実習に参加することが保育職への動機づけの低下を抑制することが示された。さらに、日常的な乳幼児との接触が学生自身の保育者としての適性感に影響し、それが保育者希望動機づけに影響することが示唆された。

キーワード：自主実習、動機づけ、保育体験、日常的な乳幼児との接触、入学前の保育体験

### 保育体験と保育職への動機との関連

#### 問題

従来、保育者養成において、実習などの現場体験の重要性がさまざまな形で指摘されている。例えば、保育所実習の前後の子ども観・保育士観の変化の調査をおこなっている松永ら<sup>1)</sup>は、実習前学生の持つ子ども観・保育士観が「かわいい」「元気な」「母親がわり」「養護的」といった内容であったが、実習後には学生に子どもの個性、保育士の専門性に着目した、より具体的で多面的な子ども観・保育士観が出てくることを見出している。そして、保育実習は職業としての保育士観、自己の適性について具体的現実を照らして吟味する機会となり、学生の職業観の確立と職業選択の促進に作用することを示唆している。吉岡<sup>2)</sup>も、保育所実習後、学生たちの保育観や児童観に変化が生じ、学生の意識が人間的に高まりを感じられるようになることを述べている。また、SD法を用いて保育士のイメージと実習の関連を検討した原<sup>3)</sup>は、実習を経験するこ

とに学生の持つイメージが明確になっていくことを示唆している。さらに、三木・桜井<sup>4)</sup>は、保育者効力感(「保育場面において子どもの発達に望ましい変化をもたらすことができるであろう保育行為をとることができる信念」)の概念を測定する尺度を構成しているが。この研究をもとに、三木<sup>5)</sup>は保育者効力感が実習の自己評価や他者評価と関連していることを示し、保育者効力感の発達的变化を検討した水野<sup>6)</sup>は、実習を経験することによって保育者効力感の構造がより実践に即したものの発達していくことを指摘している。このような点から、「実習」が学生の持つ保育士のイメージや保育者としての価値観や効力感などの形成に影響し、それが保育職の職業選択にも影響することが考えられる。実習のあり方が保育者養成のカリキュラムの中で重要な位置を占めていることに疑う余地はないだろう。

しかしながら、実習という活動が学生の不安やストレスの原因になっているという現状も指摘される。三

\* 西南女学院大学短期大学部 助教授

木・桜井<sup>4)</sup>、田中<sup>7)</sup>、森<sup>8)</sup>、杉山<sup>9)</sup>などの研究において、保育所や幼稚園での実習にかかわる、実習不安、実習ストレスの測定やストレスの検討が行われている。これらの研究を概観してみると、実習にかかわる不安やストレスの多くは、情報不足や未知の経験に対する不安や自信のなさから来るものが多く、ストレスを軽減するためには、実習の事前指導や実習体験そのものを積み重ねていくことが重要であることが示されている。そこで、2年間という限られた時間のなかで、効果的な実習の計画を立てていくことは、保育者養成において重要なテーマとなる。

他方、現在では少子化が進み、保育科に在籍する学生たちも身近に子どもと触れ合う機会が少なく、学生自身の生活経験の不足や物事への価値観の変化などもあまって、学生の保育体験そのものも減少している。例えば、長根<sup>10),11)</sup>は、「子どもに触れられる」体験が、保育科学生の学習課題を明確にし、学習に対する意欲に影響していることを示唆している。また中山<sup>12)</sup>は、児童福祉施設において子どもたちとかかわりを持った体験が、女子学生の人間関係能力・スキルを高め、育児性（好嫌感情を基にした育児に対する態度）の促進に影響を及ぼすことを見出している。このように、学生の保育体験を積み重ねていく機会を作って行くことは、保育者養成校にとっても考慮すべき内容だと思われる。

本学では、保育所実習Ⅰの開始は1年次の2月となっている。ただし、実習を依頼する園への実習の内諾をもらい簡単な事前説明をうけることと、学生自体が実習園の様子を観察し、スムーズに本実習を開始できるように、1年次の夏休み中7月～8月にかけて、自主的に実習園での保育活動への参加を促している。そこで本研究では、以上にあげた点を考慮し、本学で実施された自主的な保育実習（以下自主実習）への参加及び日常的な乳幼児との接触や入学前の保育体験が、学生の保育者希望動機づけにどのように関連しているかを明らかにすることを目的とする。

## 方法

**調査対象：**短期大学の保育科に所属する1年次の学生197名（全て女性）。対象となった学生は、保育士養成課程としての保育実習は全く体験していなかった。ここでの自主実習は、2月に保育実習Ⅰとして10日間の実習を実施する保育所に、夏期休暇中実習依頼のために園を訪問し、その際に3日前後の保育体験をすると

いうものであった。対象となった学生の2年間の実習のスケジュールをTable 1に示す。

**調査内容：**調査内容は以下の16項目であった。(1)自主実習の有無及び、自主実習の日程期間、園名。(2)健康診断を受ける必要があったか。(3)検便を受ける必要があったか。(4)未満児の保育室で保育を行ったか。(5)子どもへの食事の援助を行ったか。(6)入学前の保育体験の有無、その時期、日程期間、内容。(7)実習以外での日常的な乳幼児との接触の程度とその対象。(8)自主実習保での子どもとの関わりの程度。(9)自主実習での子どもの観察ができた程度。(10)自主実習の充実度。(11)今後の保育実習の必要性。(12)現在の保育者になりたい動機づけの程度。(13)入学前の保育者になりたい動機づけの程度。(14)自己の保育者としての適性の程度とその理由。(15)自主実習における自己成長の程度とその理由。(16)これから授業で学びたいこと。(1)～(6)の質問に関しては「はい」「いいえ」の2件法で回答を求め、(7)～(15)の程度をきく質問は4段階評定（4. 非常に－1. 全く）で回答を求めた。(6)、(7)、(14)～(16)の理由等を尋ねる質問は自由回答で答えを求めた。

学年	時期	実 習 内 容	期 間
1年	5月	施設見学 (児童福祉施設2カ所)	
	7月,8月	保育所(自主実習)	
	11月,12月	教育実習Ⅰ(幼稚園)	1週間
	2月	観察実習 保育所実習Ⅰ	10日間
2年	5月,6月	教育実習Ⅰ(幼稚園)	1週間
		参加実習	
	7月	保育所実習Ⅱ <sup>(1)</sup>	10日間
	8月,9月	施設実習Ⅰ	10日間
		施設実習Ⅱ <sup>(1)</sup>	10日間
	10月	教育実習Ⅱ	2週間
	11月,12月	小児保健実習 (小児病棟)	3日間

(1)学生は保育所実習Ⅱもしくは施設実習Ⅱの一方を選択する。

Table 1 2年間の実習スケジュール

Table 1 The practice schedule for 2 years.

## 結果と考察

### 自主実習に関する基礎調査結果

回答に不備がなかった194名の結果について以下に示す。1年次の夏期休暇中に自主実習を行った学生は144名(74.2%)、行わなかった学生47名(24.2%)、保育所以外の施設で実習を行ったもの3名(1.5%)であった(Table 2参照)。全体の4分の3の学生が自主実習を行っていた。自主実習を行わなかった理由としては、そのほとんどが園との日程の調整がうまくつかなかったためであった。自主実習を行った期間ごとの人数を

Table 3に示す。ほぼ1週間の自主実習を行っていた学生もいたが、多くの学生は3日間の自主実習を行っていた(20.7%)。また、1日だけという自主実習も少なからずあった(6.2%)。

次に、自主実習に参加するにあたって健康診断、検便が必要であったかどうかの結果をTable 4に、自主実習で未満児の保育および子どもへの食事の援助を行ったかどうかの結果をTable 5に示す。健康診断が必要だったもの11名(7.5%)、検便が必要だったもの19名(13.1%)、このうち健康診断、検便ともに必要だったものは8名(5.5%)であった。未満児の保育に参加した学生は108名(74.5%)、子どもへの食事の援助を行った学生は121名(82.9%)であった。このうち健康診断を受けずに未満児の保育に参加したもの99名、子どもへの食事の援助を行ったもの112名、検便を受けずに未満児の保育に参加したもの91名、子どもへの食事の援助を行ったもの105名であった。現在、未満児に対する保育が必要となる保育所実習では、健康診断や検便の結果を提出することになっている地域がほとんどであるが、自主実習においては1割程度の園しか学生の健康状態のチェックを必要としていないことが示された。ただし、自主実習ではあっても、多くの学生が未満児の保育室に入ったり、食事の援助に参加している実態を考慮すると、学生の健康状態のチェックを養成校としてどのように取り組むか考える必要があると思われる。

	保育所	保育所以外	参加無し
自主実習への参加	144 (74.2)	3 (1.6)	47 (24.2)

Table 2 自主実習に参加した学生の頻度 (%)

Table 2 The frequency of students who participated in voluntary practice in day nurseries.

	1日間	2日間	3日間	4日間	5日間	6日間	7日間
期間	9 (6.2)	30 (20.7)	96 (66.2)	3 (2.1)	3 (2.1)	3 (2.1)	1 (.7)

Table 3 自主実習の期間の頻度 (%)

Table 3 The frequency in the period when students participated in voluntary practice in day nurseries.

	必要	不必要
自主実習での健康診断	11 (7.5)	135 (92.5)
自主実習での検便	19 (13.1)	126 (86.9)

Table 4 自主実習で健康診断・検便が必要であった頻度 (%)

Table 4 The frequency that students must have a physical examination and stool test before participating in voluntary practice in day nurseries.

	参加	不参加
自主実習での未満児の保育	108 (74.5)	37 (25.5)
自主実習での食事の援助	121 (82.9)	25 (17.1)

Table 5 自主実習で未満児の保育、食事の援助に参加した頻度 (%)

Table 5 The frequency that students participated in helping with child care of less than 3 year-old children and with meals for these children during voluntary practice in day nurseries.

## 学生の入学前の保育体験および日常的な乳幼児との接触に関する調査結果

学生の保育体験について、入学前の保育体験の有無、その時期と期間をTable 6, 7, 8に、学生の日常的な乳幼児との接触の程度をTable 9に示す。その結果、入学前の保育体験があると回答した学生は101名(59.1%)でおよそ6割の学生が何らかの形で保育体験を経験していた。ただし、その内容は、ほとんどが中学校か高等学校の家庭科の授業の一環として行われたものであり、その期間は1週間以上や1年間毎月1回ずつという長期にわたるものがそれぞれ1例あったが、半数以上の52名は1日のみの保育体験であった。また、日常的に乳幼児期の子どもと接する機会がややある(45名)、非常にある(16名)と回答した学生は合わせて61名(33.2%)であり、3分の1程度の学生しか日常的に乳幼児期の子どもと接触する機会がないことが示された。ややある、非常にあると回答した学生が接する乳幼児はきょうだい・いとこ・親戚の子ども25名、アルバイト・ボランティア14名、近所の子ども9名、きょうだい・いとこ8名、友達・知り合いの子ども5名であった。よく接する子どもとしては、きょうだいや親戚の子どもがやはり多かったが、幼児スイミングスクールなどのアルバイトや図書館の読み聞かせや合唱団でのボランティアを通して子どもと接している学生もついで多かった。積極的に子どもたちと接する機会を持とうとしている学生もいることはいるが、実際には多くの学生が日常的に乳幼児期の子どもたちと接する機会を持っていないことが示された。

	有り	無し
入学前の保育体験	101 (59.1)	70 (40.9)

Table 6 入学前の学生の保育体験の有無

Table 6 The frequency of nurturing experience which students had participated in before entering junior college.

	中学時代	高等学校時代
入学前の保育体験の時期	35 (35.7)	63 (64.3)

Table 7 入学前の保育体験に参加した時期

Table 7 The frequency the time when students had participated in nurturing experiences before entering junior college.

	1日間	2日間	3日間	4日間	5日間	6日間以上
期間	52 (54.2)	19 (19.8)	17 (17.7)	2 (2.1)	2 (2.1)	4 (4.2)

Table 8 入学前の保育体験の期間

Table 8 The frequency in the period when students had participated in nurturing experiences before entering junior college.

	全くない	あまりない	ややある	非常にある
接触の程度	63 (34.2)	60 (32.6)	45 (24.5)	16 (8.7)

Table 9 日常的な乳幼児との接触の程度

Table 9 The frequency with the degree that students care for infants daily.

次に自主実習後にこれから授業で学びたいこととして自由記述を求めた回答を、カテゴリーに分類し、自主実習を行った学生と、行っていない学生の頻度をTable 10に示す。各カテゴリーの内容を以下に説明する。

- ・遊び・実技：子どもの遊び、手遊び、絵本、紙芝居、歌、ピアノ、体育など具体的な遊びや実技の内容に関するもの。
- ・子どもへの関わり方：子どもへの関わり方、接し方、コミュニケーションなど。
- ・子どもの心理・発達：子どもの心理、感情、発達の变化など。

- ・問題行動などへの対処：喧嘩などへの対応、しつけの仕方、一人一人への援助、食事への対処、病気・怪我への対処、障害児・未満児への対処など具体的問題に対する対応方法。

- ・保育全般：保育者としての知識、環境構成など。

- ・保護者との関わり：保護者への対応の仕方など。

自主実習あり・なし×授業で学びたいことのカテゴリーの $\chi^2$ 検定を行った結果、有意な差がみられた( $\chi^2=18.32$ ,  $df=6$ ,  $p<.01$ )。自主実習を行った学生は、遊び・実技のような具体的な保育技能を学びたいと回答している割合が高いのに対して、自主実習を行っていない学生は今後学びたい課題が書かれていなかったり、「子どもへの関わり方」というような抽象的な回答の割合が多いことが示された。しかしながら、入学前の保育体験の有無に関しても同じく $\chi^2$ 検定を行ったが有意な差はみられなかった。この結果は、学生が保育実習後の自己の課題としては「保育援助・指導技術」「子ども理解」を多くあげてことを示した吾田<sup>13)</sup>の研究と類似しているといえる。また、水野<sup>6)</sup>も実習前、後と時間の経過にともなって保育者効力感が分化し、より実践に即したものに発達していくことを示している。保育現場での体験を通して学生は具体的な遊びの方法など、より実践的な実技や子ども理解に対する必要性と自己の未熟さを認識するようである。それと比較すると、約6割の学生が中学、高校時代に短期間の保育体験をしてはいたが、それが保育科への進学に対して影響したかもしれないけれども、さらに長期にわたって保育者としての成長に直接かかわっているとはいえない。つまり、ある時点で1度でも保育体験をすれば、そこで感じた“保育者になる”という意識が長期にわたって維持されるというよりも、定期的に保育体験に参加し、その度に自己を振り返る経験をすることが重要なかもしれない。

	今後授業で学びたいことのカテゴリー						D.K.,N.A	合計
	遊び・実技	子どもへの関わり方	子どもの心理・発達	問題行動などへの対処	保育全般	保護者との関わり		
自主実習有り	39 (26.9)	23 (15.9)	15 (10.3)	18 (12.4)	20 (13.8)	2 (1.4)	28 (19.3)	145
自主実習無し	2 (4.3)	11 (23.4)	4 (8.5)	4 (8.5)	5 (10.6)	1 (2.1)	20 (42.6)	47

Table 10 自主実習有り・無しの学生ごとの今後授業で学びたいことのカテゴリーの頻度 (%)

Table 10 The frequency of categories of wanting to learn child care in classes in the future of each of students who participated in voluntary practices and students who didn't participate.

# 自主実習が保育者希望動機づけにあたえる効果

まず、自主実習の体験と保育者希望動機づけの程度の変化の関係をみるために、入学前の保育者希望動機づけの程度を共変量とし自主実習の有無と現在の保育者希望動機づけの程度の共分散分析を行った。その結果、自主実習の有無の主効果が有意であった ( $F(1,182)=4.01, p<.05$ ) (Fig. 1参照)。このことから、自主実習の体験が保育者希望動機づけの低下を抑制する効果があるのかもしれないと考えられる。

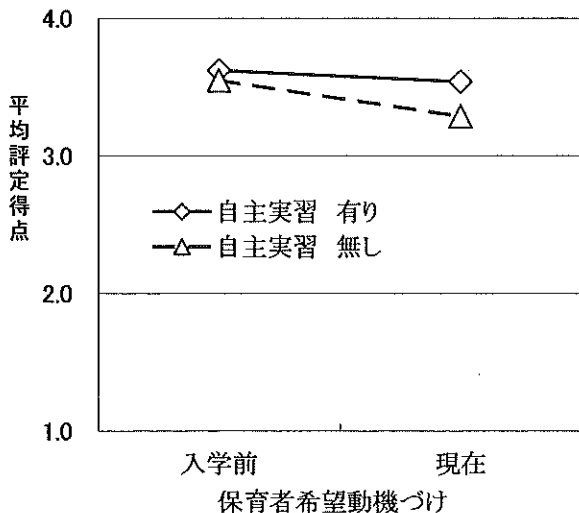


Fig. 1. 自主実習体験の有無と保育者希望動機づけの変化

Fig. 1 The effect of participating in voluntary practices in day nurseries upon motivation to become nurturing persons.

次に、各要因が現在の保育者希望動機づけの程度とどのような関係にあるかを検討するために、階層的重回帰分析を行った (Fig. 2参照)。Fig. 2から、日常的な子どもとの接触が、自己の保育者としての適性の判断に影響し、それが現在の保育者希望動機づけに影響していることが示唆された。また、自主実習で子どもたちの観察がよくできたと感じている学生は、自主実習が充実していたと感じ、自己の成長につながった

と考えている。そして、自主実習が充実している学生は、保育者希望動機づけが高いことが示された。しかしながら、自主実習での子どもの観察は現在の保育者希望動機づけに負の影響も与えていることも示された。これは、観察がよくできたことで、逆に、自己の保育者としての適性などに疑問が生じたためかもしれない。

本研究の結果から、自主実習に参加することが、学生の保育者をめざす動機の低下を抑制する効果があることが示唆された。先の分析結果も考慮すると、やはり自主的な実習に参加することは保育科の学生にとって有益な経験になるといえるかもしれない。確かに、先行研究の中でも学生の保育者効力感が実習直後に増大すること<sup>4),5)</sup>、実習経験により子ども一人ひとりを理解できるという自信が高まり、その自信が総合的にみて自分はいまよくできるという自信につながること<sup>6)</sup>などが示されている。しかしながら、学生が実習に関して不安やストレスを感じている<sup>7)-9)</sup>ということも事実である。先行研究でも学生は実習という未知の世界に対して不安を強く感じていること<sup>9)</sup>、子どもとの関わり方やコミュニケーションに劣等感を持っていること<sup>10)</sup>が示されている。本研究の結果からも、自主実習で子どもの観察がよくできたと感じている学生ほど保育者希望動機づけが低下する傾向もあることを考えると、学生に対して自主実習以前にどのような知識や技術を教えていくかは養成校として重要な課題となるだろう。本研究の中でも、日常的な乳幼児との接触経験が多い学生ほど、保育者としての適性感が高くそれが保育者希望動機づけに影響していることが示されていた。先行研究でも、保育者効力感がストレス軽減に有効であること<sup>4),5)</sup>が示されている。ボランティアなどを通して学生にいかに多くの子どもたちとの接触する機会を持たせるか、またそれを長期にわたって継続することができるかが重要なかもしれない。

保育体験と保育職への動機との関連

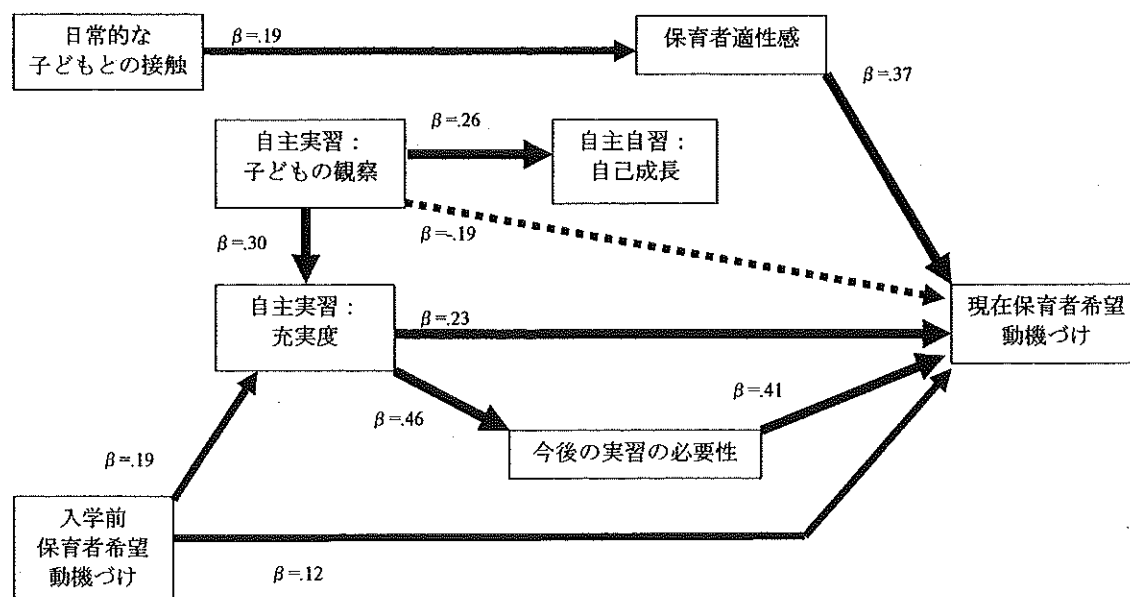


Fig. 2. 保育者希望動機づけに関わる要因のパス図

Fig. 2. Mapping path of factors which influence motivation to become nurturing persons.

引用文献

- 1) 松永しのぶ・坪井寿子・田中奈緒子・伊藤嘉奈子：保育実習が学生の子ども観、保育士観におよぼす影響，鎌倉女子大学紀要，9，pp.1-11，2002.
- 2) 吉岡真知子：保育所実習を終えた学生の「保育所保育」に対する意識の一考察，東大阪短期大学研究紀要，24，pp.83-92，1998.
- 3) 原 孝成：保育実習の体験と保育士のイメージの関連，西南女学院短期大学研究紀要，50，pp.1-8，2003.
- 4) 三木知子・桜井茂男：保育専攻短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響，教育心理学研究，46，pp.203-211，1998.
- 5) 三木知子，保育者効力感と実習（自己，他者）評価に関する縦断的研究，頤栄短期大学研究紀要，第30巻，pp.19-29，1999.
- 6) 水野里恵，幼児教育専攻学生の保育者効力感—その発達過程と保育実習評価との関連—，愛知江南短期大学紀要，30，pp.97-110，2001.
- 7) 田中秀明，保育実習不安尺度に関する基礎的研究—本専攻1年次生の実習不安についての調査—，共栄児童福祉研究，8，pp.53-60，2001.
- 8) 森津誠，教育実習生の実習不安と実習達成感について，東大阪短期大学研究紀要，26，pp.105-115，2000.
- 9) 杉山喜美恵，教育実習事前指導のあり方について
- 10) 長根利紀代：保育科学生の学習効果と意欲—教育実習事前指導における課題実習を通して—，名古屋柳城短期大学研究紀要，24，pp.101-115，2002.
- 11) 長根利紀代：保育を目指す学生の「自覚」について—教育実習を通して—，名古屋柳城短期大学研究紀要，25，pp.77-92，2003.
- 12) 中山哲哉：子どもとの接触経験が女子学生の育児性に及ぼす影響—児童福祉施設における社会福祉実習の場合—，吉備国際大学社会福祉学部研究紀要，9，pp.117-2004，2004.
- 13) 吾田富士子，保育者養成の課題1—保育所実習指導から—，藤女子大学紀要 第II部，40，pp.79-90，2002.
- 14) 朝倉美香，一宮幼稚園における観察実習生と担任教諭・園児の人間関係，一宮女子短期大学報告，39，pp.257-268，2000.

**A Study of Relationship between Students' Child Care Experiences  
and Motivation to Become Nurturing Persons:  
Investigating Students' Voluntary Practice in Day Nurseries,  
Daily Infant Care, and Nurturing Experiences before  
Entering Junior College.**

HARA Takaaki

<Abstract>

The purpose of this research was to examine the relationship between voluntary practice in day nurseries, day-care infant care experiences, and nurturing experiences before entering junior college and these students' degrees of motivation to become nurturing persons. The investigation was done with 194 students in the junior college in the Department of Child Education and Care. Results showed that, 74.2% of these students participated in voluntary practice in day nurseries. 66.2% of those students participated in voluntary practice for 3 days. Most of those students participated in helping with child care of less than 3 year-old children and with meals for these children. 59.1% of these students had participated in child care experiences before junior college entrance. However, 54.2% of those students had brief experiences contact among of only one day. There was no contact with day-care infants at all or not much an actual reason 66.8% of the students. The rate giving specific child care techniques as "wanting to learn child care in classes in the future" was higher among students who participated in voluntary practice than in students who didn't participate. Also, it was shown that participating in voluntary practice tended to restrain these students from a decline in motivation to become nurturing persons. Moreover, they suggested that contact with day-care infants had influenced their aptitude or feeling to become care persons as students. Such experiences influenced their motivation in wanting to become nurturing child care professionals.

**Key words:** voluntary practice in day nurseries, motivation, nurturing experiences, daily infant care, nurturing experiences before entering junior college

The relationship between child care experiences and motivation